広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|---|---|
| Title | 関谷君の死を悼む〈故 関谷孝英君を偲んで〉 |
| Author(s) | 栗原，秀雄 |
| Citation | 広大言語 , 10 : 39 - 40 |
| Issue Date | 1970-12-15 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046351 |
| Right | |
| Relation | |

# 関谷君の死を悼む

栗原秀雄

「コンユウ五ジセキモトタクニテオアイシタシ」セキタニ

宿酔に疲れた重い頭をぼんやりと休めていた正月三日の昼過ぎ、思いもよらぬ電報が舞い込んだ。

いつのことであったか、この電報と同じように、何の前ぶれもなしに、突然会社へ電話をかけてきて、一緒に飲んで歩いたことがある。まだ駈けだ出しの記者時代で、長崎からやって来た。それほど深いつきあいがあったわけではないが、言語学教室の忘年会や追い出しコンパなどの席で、僕が、放送の世界に起こっているいわゆる「反動化」の動き―― 数多くの放送中止事件や、番組内容に対する政府、右翼の露骨な干渉などを話して聞かせたことが、彼の関心をひきつけたらしい。朝日新聞の記者として自らもマスコミの現場にとび込んだ関谷君にとって、マスコミの自主規制、反動化の動きは、他人事ではなくなった。コップ酒で喉をしめしながら、彼はその当時出版されて大きな反響をよんだ「デスク日記」（小和田次郎著、みすず書房）について、熱っぽく語った。

そして昨年の正月、彼は年賀状にこう書いてきた。

「新年おめでとうございます。

放送にも新聞にも、一段と厳しい年になりそうです。ガンバロー。」

電報で指定された関本先生の家には、五時ちょっと過ぎに着いた。彼は来ていなかった。不意の来訪者は、先生を驚かせた。この時間に僕と二人で訪問するということを、彼は全く連絡していなかったのである。断わりもなしに先生の家を指定してきたのだ。そればかりではない。不意の電報で呼び出しておきながら、当の本人は一向に現われる気配がなかった。電話すらかけてこない。待つこと一時間余り、六時をまわってから、彼は汗を拭き拭き飛び込んできた。

下関の方に離れていて、新聞やテレビで間接的にしか知り得ない広島大学のいわゆる〃紛争〃は、彼にとって重大な関心事であった。「セキモトタク」を指定して僕を呼び出したのは、封鎖―機動隊導入―正常化という〃広大紛争の経緯について、先生の口から直接話を聞きたいという意図があったからであった。どちらかというと民青親派的な考え方をもっていた彼は、全共闘のやり方には批判的でもった。それに対して、僕は機動隊導入という最悪の事態を招いた大学当局に、逆に反感

をもっていた。酒が入ったせいもあって僕はかなりきつい言葉で、反駁したりした。

三時間余りの時は束の間に過ぎた。国鉄の五日市駅まで、暗い、遠い道を歩いて帰った。「先生に対して、あんなにきついことまで言われなくても、よかったんじゃないかなぁ」ーあのちょっといかつい顔の、ひとの好さそうな目を細めながら、彼はぽつんとつぶやくように言った。

五日市から電車に乗って、広島駅のプラットフォームで別れた。それが最後になった。思いがけない時に突然電話や電報で呼びだして、気の合った話を肴に、うまい酒を飲ませてくれた彼は、もういない。その死もまた突然であった。

（１９７０、１０、２３）

# 関谷孝英君の死を悼む

原野　昇

昭和４５年９月１７日、フランスから３年ぶりに広島に帰った僕は、１０日余を身辺の諸事に忙殺されながらも、友人、知人へ帰国の報告をせねばと幾枚かの挨拶状の印刷を依頼した。９月下旬それが出来上ってきたので、一人ずつえ顔を思い出しながら住所を書いた。君へは、帰って来たから広島へ来る折があれば是非寄るようにと、一筆書き添えた。君のこと故、返事など期待していなかったが、もしかすると電話でもかけてくるかも知れないとは思っていた。１０月１日、僕の留守中に朝日新聞下関支局から電話があったという。しかし相手は君ではなかった。君の同僚のＡという人から君の訃を伝えるものであったとの事である。信じられなかった。Ａ氏は翌日の夜もう一度僕に直接電話下さると言われて電話を初られたそうである。翌２日、関本先生から偶然電話がかゝってきたが、僕は高鳴る胸を抑えながら、君のことには全然ふれなかった。その夜かゝってくるべきＡ氏からの電話で、前夜の電話の内容が誤りであったとの訂正が伝えられる事を、いかばかりでも期待していたからである。その夜９時半、電話は鳴った。――誤報ではなかった。ガス中毒による事故死というではないか。何ということをしてくれたんだ。

君と僕とは広大に入学してから知り合った仲だが、君は入学以来常にこの社会の矛盾に目を向けていた。特にこの日本の社会に、虐げられたる人々、生きていく為に朝から晩まで文字通り身を粉にして働き、死ぬまで最低の生活を余儀なくされている人々の多くいる事に憤り、それを強いている体制とその権力に激しく反撥していた。君の頭からは、いつもその事が離れていなかった。とは